

教 育 長 様

校番 4 広 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
平成30年度 報告書**

研究の概要

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

- ア 身に付けるべき「資質・能力」について、生徒がそれらを身に付け、また自身の状況に対する妥当な自己評価をすることができ、メタ認知力を向上できる。
 - イ 生徒が、総合的な学習の時間を中心として探究的な学習を行うことができ、「資質・能力」を活用することができる。
- アとイを通して、主体性を持って、課題発見・解決に取り組む生徒を育成することを目標とする。

研究内容（※対象、時期、方法を含む）

○総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について

- ・（4～11月）1学年総合的な学習の時間についての構成の作成
 - 4～8月 各コンピテンシー（資質・能力）の習得……①
 - 9～10月 地域（広・呉）について研究テーマの設定、調査、中間発表……②
 - 批判的思考力や対話力、表現力等を活用
 - 11～2月 地域（広・呉）について課題発見・課題の設定、調査、課題の見直し、解決策の考案、発表……③
 - 批判的思考力や対話力、表現力等を活用
- ・（10月・3月）外部連携の在り方についての検討（近隣大学）
- ・（11月）近隣中学校の総合的な学習の時間について調査することで、高校での探究の教材を検討
- ・（11月）他校視察
- ・（11月）新学習指導要領における探究活動の研究
- ・（1・2月）次年度の総合的な学習・総合的な探求の時間の計画を検討

①について・・・総合的な学習の時間の授業については、昨年度の内容を変更しながら行った。第1学年は、コンピテンシーの習得を、活動を通して身に付けさせるために、各コンピテンシーに焦点を当てた活動を行わせた。例えば、批判的思考力に焦点を当てた活動として、「9000人の中学1年生を対象にした書き取りテストで、「革新」を書けた生徒はわずか5.9%にすぎなかった。ゆえに、中学1年生の漢字の書き取り能力は低下しているといえる。」という文章に対する問いを立てる活動を行うことで、問いを作り、根拠を探す・探す方法を検討することを体験させることで、批判的思考力を身に付けさせた。

②・③について・・・まず②の活動で地域について興味を持った内容についての研究を行い、調査の方法や、情報の整理の方法などを身に付け、発表を通して表現力を活用させた。また、③では課題発見から解決までの過程を通して、論理的に説明する力などを活用させた。②の活動と違い、調査で終わらず、課題の解決策までを検討させ、②の活動での発表の反省を生かした研究を行わせた。

○資質・能力の評価について

- ・（4月）広高校版ポートフォリオの作成
- ・（9～11月）ルーブリックの作成（生徒自己評価表の作成、自己評価、集計）
- ・（11月）公開研究授業 1コマの授業を全員で参観し、コンピテンシーを発揮できる場の設定について協議
- ・（6, 9, 11, 2月）東京学芸大学 岸学教授、鎌田正裕教授からの指導助言（コンピテンシーの評価方法、エージェンシーを発揮できるようにするための要素、コンピテンシーを育成・活用する授業、批判的思考力と問題解決力を中心に生徒の特徴パターンの検討）
- ・（3月）教員による、生徒のコンピテンシーの活用についての評価
- ・（月に1度、1年間）コンピテンシーの自己評価

コンピテンシーの評価の方法として、「生徒による自己評価（1か月単位）」、「生徒による一つの授業での自己評価」、「質問紙調査による評価（分析）」、「ルーブリックを用いた教員による評価」の4種類を行った。

今年度の成果と次年度の課題（※仮説の検証を含む）

1 総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について（○成果 ●課題）

○公開研究授業に全員が参加し、探究的な学習について、共有することができた。

●外部との連携（近隣大学等）についての内容を具体化していく。

●自己の在り方生き方と探究活動が結びついておらず、課題発見・解決に「自分ごと」として取り組ませることに課題が残った。

（仮説の検証）

探究的な学習について共有する機会として、公開研究授業や研修会などを設け、教員に「探究的な学習」の意義は共有できており、総合的な学習の時間においては探究の過程を意識して生徒に活動させることができていたと考えられる。しかし、探究の過程のうち、「整理・分析」において、根拠が不足した状態での分析になり、「まとめ・表現」において論理的な部分が不十分な内容を表現・発表している生徒が多く見受けられた。教員による関わりを増やし、生徒に批判的に物事を見る機会を増やす等学習内容や指導方法を改善する。

2 資質・能力の評価について（○成果 ●課題）

○重視するコンピテンシーを7つへ見直した。また、そのすべてのコンピテンシーについて、すべての学校教育活動を通して、活用する場面があることを教員間で確認した。

○コンピテンシーの習得を評価するルーブリックを作成した。

●生徒の自己評価や教員による評価の妥当性の検証をする必要がある。→生徒の自己評価と教員による評価の差を埋める手立てを検討する必要がある。

●コンピテンシーベースのカリキュラムマップを作成する。→どの活動でどのコンピテンシーを活用するのか見える化し、評価する際にその活動に注目して評価できるようにする）

（仮説の検証）

重視するコンピテンシーを7つへ見直し、それを評価するルーブリックを簡潔なものに改善した。生徒の自己評価の妥当性については課題が残るが、自己評価の機会を月に1度は設けることができたため、生徒は自身の学習を振り返ることはできていたと考えられる。

評価の数値については、教員による評価の平均が $3.6/4$ 、生徒による自己評価の平均が $3.3/4$ であった。教員による評価と生徒による評価ではどのコンピテンシーも教員による評価の方がかなり高い傾向にあり、またどちらも数値が高かった。そのため、生徒が自身を振り返ったり、教員が生徒の成長を見取ったりする際、「十分にできた」と評価する生徒が半数以上になっていると考えられ、足りていない部分があっても気づくのが難しい状態になっており、また気づいてもそれを生かして改善しようという次の学習への意欲につながらなかったと考えられる。